

《2011年9月例会報告》

【日時】2011年9月30日（金）19：10～21：10（終了後は「ルン」～12：00頃）

【会場】筑波大学附属高校 3F 会議室（東京都文京区大塚 1-9-1）

【テーマ】国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム報告

ー北京で感じ、考えた、「オリンピック教育」の現状と今後

【報告者】中塚義実（筑波大学附属高校）

【参加者（会員）6名】金子正彦（会社員）、嶋崎雅規（帝京高校）、関谷綾子（関谷法律事務所）、田中理恵（サッカーファン）、中塚義実（筑波大学附属高校）、藤田直樹（ビバ！サッカー研究会）、

【参加者（未会員）6名】★笹池哲哉（サッカーファン）、真田久（筑波大学）、★白木文子（都立国際高校）、★鈴木亨（筑波大学附属高校）、★田原淳子（国士舘大学）、★宮崎明世（筑波大学）

【ルンからの参加者】白井久明

【報告書作成者】中塚義実

注1）★は初参加のため参加費無料

注2）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

国際ピエール・ド・クーベルタン ユースフォーラム報告

ー北京で感じ、考えた、「オリンピック教育」の現状と今後ー

中塚義実（筑波大学附属高校）

<目 次>

- I. 「オリンピック教育」との関わりー筑波大学の取り組み
- II. 第8回 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム報告
- III. ディスカッション
- IV. 発表者の感想・意見（中塚義実）

I. 「オリンピック教育」との関わりー筑波大学の取り組み

中塚：関わるようになるまでは知りませんでした。世界中に「ピエール・ド・クーベルタン」の名を冠した「クーベルタン・スクール」が約50校、うち高校が20～30校あります。2年に1回、クーベルタン・スクールの持ち回りで「ユースフォーラム」が開かれ、今年の8月、アジアで最初のクーベルタン・スクールである北京第四中学校で第8回ユースフォーラムが開かれました。日本からは筑波大学附属高校がオブザーバースクールとして参加し、生徒2名を引率して、私が全期間帯

同しました。

ヨーロッパで始まったオリンピック教育のムーブメントですが、アジアからの参加校が求められており、今回の参加につながりました。このあたりの経緯について、クーベルタン委員会理事の田原さんからご説明いただけないでしょうか。

田原：私は1991年に、国際クーベルタン委員会の会員になりました。ずっと名前だけの幽霊会員でしたが、会長のノーベルト・ミュラーさんが、ヨーロッパ中心の活動から世界的な活動へと変えていきたいという方向性を打ち出し、5年ほど前に理事になりました。

理事になってから、いろんな行事に直接参加するようになりました。ユースフォーラムには2007年、チェコのターボルで開かれたときに初めて参加し、素晴らしい行事だと思いました。そのときアジアからは、中国と韓国がオブザーバーとして参加していましたが、委員会の意向としては、アジアからはぜひ日本に参加してほしいという思いがありました。私自身も、日本の高校もぜひ参加して、このような国際交流にかかわってほしいと強く思いました。ちょうど2016年のオリンピックを東京に招致しようとしていた時期でしたので、東京都教育庁に相談し、都立国際高校から白木先生と生徒さん2名に、2009年のギリシャで開かれたユース・フォーラムに参加していただきました。将来的には、日本からもクーベルタン・スクールという形で正式にクーベルタン・スクールズ・ネットワークに加盟をして、フルメンバー（7人の生徒と引率の先生）での参加ができればという希望をもっていました。そうした中で、筑波大学が「CORE」を立ち上げ、オリンピック教育を学校の方針として展開しようとしているという話を耳にしました。そこで、「筑波大学の附属学校に参加をお願いするのが日本では最もふさわしいのではないか」と思い、当時、教育長をされていた阿部生雄先生にご相談し、中塚先生をご紹介いただいた次第です。

中塚：ちょうどそれが去年の今ごろ（2010年10月ごろ）でしたね。真田さんから、筑波大学サイドの補足をしていただけませんか。

真田：筑波大学ではオリンピック教育を、大学でも、附属学校でも、特別支援学校も含めて、スポーツを通しての教育が為されていました。IOC全体が「オリンピック教育」を重視していこうという流れの中で、我々からも情報発信していくことが大事なことで、むしろ我々がやっていることが世界でやっているオリンピック教育の中でも先進的なものがあるだろうと思い、大学の方で相談して組織を立ち上げることになりました。IOCにも相談したところ「ぜひやってほしい」と。オリンピックの教育的な展開を、附属学校での実践事例を通して示せるところに筑波大学の意義があります。

中塚：ちょうど去年の今ごろ、筑波大学におけるオリンピック教育の組織の立ち上げと、クーベルタン・ユースフォーラムがあるという話が同時にきて、それまで全く関係なかった私が急に渦中の人になってしまったというわけです。

そもそも「オリンピック教育」という言葉に対して、体育の先生ですらピンと来ない。競技者を育てるための教育プログラムなのか、オリンピックを取り巻く政治や経済との関連、特に裏側の部分を学習する教育なのか、あるいは、うちの学校で言うと、今日は物理科の鈴木さんも来られていますが、物理オリンピックや数学オリンピックなど、オリンピックと名がつく関連行事がいろいろあります。そもそもオリンピック教育って何？ ユースフォーラムって何？ そこに生徒を連れていく？ ただでさえ忙しいのに引率は誰？ そういう問題がいろいろあって、オブザーバーとしての派遣であっても、教師集団の合意を得るのは大変でした。

物理オリンピックに引率教諭として何度か参加されている鈴木さんから、何か補足はありますか？

鈴木：国際物理オリンピック、インターナショナル・フィジックス・オリンピアドという大会が東

ヨーロッパで生まれ、40年の間に世界80か国に広がっていますが、日本が参加したのは2006年からです。優秀な高校生5人を集めて連れて行きました。関わっている人間からいうと、世間の評価ともものすごいずれを感じます。金メダルは1位だけでなく上位10%ぐらいがもらえるのですが、そのことばかり報道されます。実際に、参加した高校生は、5時間の試験が2回、理論試験と実験試験がありますが、それ以外にも9日間の会期中に、講演や交流や、いろんなプログラムがあります。受験名門校の子が多いけど、東大に行くのが全てと思っていた子の視野がぐっと広がって、人間的にも大きく成長します。

参加した5人を伸ばすだけでなく、「第1チャレンジ」と我々は呼んでいますが、全国で1,200人ぐらい参加する予選会を各地で開いて、物理を広めようというムーブメントにしようとしています。トップだけでなく、底辺を広げる活動に対して世間はもっと注目してほしいと思っているけど、なかなか注目してもらえません。そのあたりの葛藤を感じます。その部分が、オリンピック選手しか注目されないスポーツの部分と似ているのかなと、一方的にシンパシーを感じている次第です。

中塚：日本が参加したのが2006年からという話がありましたが、その年はシンガポールでの開催ですよ。うちの学校は国際交流活動に疎かったのですが、シンガポールのエリート校、ホワチョン校主催で「アジア青少年リーダーズサミット」が初めて開かれたのが2006年の夏で、私も生徒5名を引率して行っていました（今は毎年3名）。それがたまたま物理オリンピックが終わった直後で、引率されていた鈴木さんとも合流し、エリート教育の話など、シンガポールでいろいろ盛り上がったのを覚えています。

2006年からうちの学校の国際教育活動が本格化します。今までなかった事業が始まるわけで、引率者など、いろんな問題が出てきます。そんな中でクーベルタン・ユースフォーラムの話は、必ずしも歓迎口調で受け入れられたわけではありませんでした。今回の派遣も、あくまでもオブザーバーとしての参加であり、今後については、筑波大学との連携の中で、どうなっていくかはわかりません。オリンピック教育はどのように為されているのかを見てくるのが使命なのだというスタンスで合意を得たわけです。

II. 第8回 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム報告

1. 概要

中塚：期間は2011年8月13日（土）～21日（日）。会場となった北京第四中学校は、1907年創設のエリート校。国際部を持っており、国際教育事業にも積極的に取り組んでいます。アジアで唯一のクーベルタンスクールです。

参加国は、オーストラリア、オーストリア（2校）、中国、チェコ、エストニア、ドイツ（2校）、イギリス、ギリシャ、イタリア、メキシコ、ノルウェー、スロバキア、チュニジア（ここまではクーベルタンスクール。各校7名）／コンゴ、キプロス、日本、ケニア、モーリシャス、マレーシア（斜体下線はオブザーバースクール。各校2名）

参加生徒117名、引率教員22名、スタッフ約20名、そして北京四中のボランティア生徒約70名がさまざまな形で関わってくれました。

Participating Schools

Coubertin-Schools:

Australia Winners of the Australian Coubertin Award

Austria Pierre de Coubertin Bundes-Oberstufenrealgymnasium, Radstadt

Austria Don Bosco-Gymnasium, Unterwaltersdorf
China BHSF-Coubertin School, Beijing
Czech Republic Gymnázium Pierra de Coubertina, Tábor
Estonia Ülenurme Gümnaasium, Ülenurme
Germany Pierre de Coubertin-Gymnasium, Berlin
Germany Pierre de Coubertin-Gymnasium, Erfurt
Great Britain William Brookes School, Much Wenlock
Greece Lyceum Pyrgos/Pierre de Coubertin
Italy Liceo Statale “Giuliano della Rovere”, Savona
Mexico Instituto Coubertin, Oaxaca
Norway Gausdal vidergaende skole - Pierre de Coubertin
Slovakia Gymnázium Pierra de Coubertina, Piestany
Tunisia Lycée Sportif Pierre de Coubertin d’ El Menzah, Tunis

Observer Schools:

Congo Winners of the National Coubertin Award organised by the Comité Congolais Pierre de Coubertin
Cyprus Pierre de Coubertin-Pancyprian Gymnasium, Nicosia
Japan Senior High School, Tokyo
Kenya Kipkeino School, Eldoret
Mauritius Winners of the National Coubertin Award organised by the Mauritius Pierre de Coubertin Committee
Malaysia Senior Methodist Girls School Kuala Lumpur

first participation

中塚：例えば、オーストラリアは単一の学校ではありません。「クーベルタン賞」を国中でやっており、受賞した生徒の中から選ばれてユースフォーラムに参加していると聞きました。

田原：オーストラリアでは、毎年、高校生を対象としたクーベルタン賞の選考と授与をすべての州で行っていて、各州のクーベルタン賞を受賞した生徒の中から一人ずつを選んで、国際クーベルタン・ユースフォーラムに派遣しています。学校で特にオリンピック教育を実施しているわけではありませんが、クーベルタン賞を受賞した生徒なので、オリンピズムを理解し、国際ユースフォーラムに参加するにふさわしい資質を持っているとみなされています。

中塚：それ以外は大体、単一の学校が出てきています。英国のウィリアム・ブルックス・スクールというのは、クーベルタンが近代オリンピックのヒントを得た競技会が行われている、英国西部のマッシュウェンロックの学校です。彼らは、自分たちの学校名である、ウィリアム・ペニー・ブルックスの為したことを非常に誇りに思っているようで、いただいた小冊子には、自分たちが近代オリンピックを復興したと書かれています。

本校からは、高3のY（ダンス部）と高2のK（テニス部）の、いずれも女子が参加しました。4月はいじめの全校集会で3学年一斉にアナウンスしたところ7名から応募があり、提出書類や面接等で2名に選考しました。二人とも準備段階から報告段階まで、大変意欲的に取り組んでくれました。

2. クーベルタン・アワードをめぐる

中塚：「クーベルタン・アワード」を目指してのさまざまなプログラムが、このフォーラムの中心となります。ほとんどは期間中に行われますが、事前にやっておかなくてはならない課題もあります。最終日のクロージング・セレモニーで表彰されますが、受賞したのは7割程度。残り3割はメダルをもらえません。結構シビアです。

<クーベルタン賞のための課題>

1. コミュニティ・サービス … 事前にそれぞれの国や地域でボランティア活動に取り組む（各校の校長先生の証明を持参）
2. オリンピック知識テスト … 古代～近代オリンピックの歴史や出来事、オリンピズムについての筆記試験。30分程度で終わる分量だが、英語での解答が求められることと、ギリシャの歴史などヨーロッパ人向けの出題が多いので、ヨーロッパ圏以外には難しいと感じた。もっとも、「過去問」をしっかりとやっておけば、だいたいできるようだ。
3. スポーツテスト
 - 1) 太極拳 … 事前に、配信された映像で練習してくる。期間中もモーニングエクササイズで復讐。最後は、北京四中の太極拳の先生の前で実演。全員合格した模様。
 - 2) クロスカントリー … 男子 2,300m、女子 1,700m の校内回周コース。本校 2 年女子 K が、女子レースでトップだった！
 - 3) 以下から 3 つを選択 … 標準記録がある
 - ①水泳（50m自由型）
 - ②短距離走（男子 100m、女子 75m）
 - ③走幅跳
 - ④砲丸投
4. アート・パフォーマンス … 7 分間のパフォーマンス（各国のスポーツ文化を表現）
5. オリンピック・ヴァリューズ
 - 1) “Empowerment of Sport” と題するレポート … 事前に作成したものを提出
 - 2) グループ・ディスカッション … 10 人程度のグループに分かれてディスカッション。テーマは次のとおり
 - 討議① Citius, Altius, Fortius（より速く、より高く、より強く）
 - 討議② Respect, Excellence and Friendship（尊重、卓越、友情）
 - 討議③ Contributing To Intercultural Understanding

3. スケジュールとトピック（スライドを用いて）

中塚：ではユースフォーラムの実際を、写真を見ながら説明していきます（本報告では写真はなし）

- 8/13（土）7：30 羽田空港国際線ターミナル集合。2 名とも家族全員が見送りに来ていた
- 9：30 出発 →3 時間のフライト（時差 1 時間を引いて）→ 11：30 北京国際空港着
- 13：30 頃 ミドルスクールの寮に到着。さっそく北京四中生からインタビューを受ける
- ～16：30 頃 近くの胡同を北京四中生の案内で散策
- 18：30 頃 寮を出てシニアスクール（メイン会場）へ。10 分ほど歩くので不便（8/16 に移動することになった）
- 19：30 頃 夕食（シニアスクールの食堂でバイキング。来た人から食べてよい。以下同様）
- 21：00 全体会（諸注意等）
- 21：30 教師ミーティング
- その後、ミドルスクールの寮に戻ってシャワー。同室のアナンタヤさんと話をして寝る
- ※門限 22：30、消灯 23：00。男女フロア間の行き来は禁止など、学校の寮ならではのルールあり

8/14 (日) 7:15 太極拳 (全員で、練習してきた型を実施。クーベルタン賞の準備でもある)
8:00 朝食
9:00 北京四中ガイドツアー (グループに分かれて、北京四中生の案内で学校見学)
10:00 講義①オリンピズムとピエール・ド・クーベルタンについて
講義②中国とオリンピックの関わり
12:30 昼食
14:00 頃 バナー作成
16:30 オープニングセレモニー
19:00 夕食
19:30 頃から 歓迎文化祭 (北京四中主催)
ブースを回りながら中国文化を体験したりゲームを楽しむ。雨だったので屋内になった

8/15 (月) 7:00 起床、7:30 教師ミーティング (生徒は7:15 太極拳)
8:00 朝食
9:00~14:15 頃 観光①紫禁城 (故宮)
15:00 グループ討議① Citius, Altius, Fortius 終了後は全体会で代表者が報告
17:00~ 学校紹介 (各校5分)
19:00 夕食
20:00~21:30 頃 学校紹介 (各校5分)

※ミドルスクールからシニアスクール (メイン会場) の寮へ、翌朝移動することになった (別の団体が使用していたらしい。会場はシニアスクールなので、これで便利になる)

8/16 (火) 7:00 起床、7:30 朝食
8:00 教師と審判の打ち合わせ (生徒はウォーミングアップ)
9:00 スポーツテスト: この日は陸上、水泳、太極拳を実施
私は25名ほどの女子のグループの誘導を担当。本校の2名はよくやっていた (Yの太極拳は「中国人よりうまい」と評価される)
12:00 頃 部屋移動&昼食
15:00 知識テスト
16:30 教師の緊急ミーティング
「生徒たちの素行」について北京四中側から嚴重注意があり、生徒への指導を徹底しようという内容。寮での男女のフロア移動、ペットボトルの放置、また教師自身による寮内喫煙…。文化の違いを踏まえた上で、当地の文化をリスペクトするよう、指導の徹底を確認した。
17:30 グループ討議② Respect, Excellence and Friendship
全員が集まっているところで、担当のオーストラリアの先生から、厳しい口調で緊急ミーティングの内容が話された。生徒たちは神妙に聞いていたが、態度が良くないため、立たされている生徒もいた。高校生、高校生への指導は、世界中どこでも同じ…
20:00 国際ダンスパーティ
北京四中主催のパーティ。各国のダンスも紹介され、最後は入り乱れて踊っていた

8/17 (水) 7:00 起床、7:30 朝食
8:30 ウォーミングアップ
9:00 クロスカントリー

男子2レース、女子2レースが行われる。Kは女子で1位だった！

14：00～18：00頃 観光②オリンピックベニュー

「鳥の巣」と「ウォーターキューブ」へ全員で出かける。「鳥の巣」は2009年に行っているのに驚きはなかったが、初めて行った「ウォーターキューブ」には驚いた。辰巳国際水泳場と区民プールと豊島園がくっついているような感じ。レストランやショップも充実している。オリンピック後の施設利用としては大変優れたモデルなのではないか。

19：30 夕食

20：00～21：15頃 グループ討議③ Contributing To Intercultural Understanding

その後生徒はホールなどでくつろく。この時Kがピアノを弾いたことが、クロージングセレモニーでのピアノ伴奏につながる。

8/18（木）7：00 起床、7：30 教師ミーティング

8：15 朝食

11：00 アート・パフォーマンス（各校7分）

13：00 昼食

14：00 アート・パフォーマンス（各校7分）

18：50 夕食

19：30 過ぎ ミニエキスポ（文化交流）

それぞれが長机1台分程度のブースを設け、各国の文化を展示して交流を楽しむ。

日本ブースのイメージは“祭”。はっぴを着て団扇や扇子を並べ、折り紙や竹とんぼで楽しんでもらった。

8/19（金）7：00 起床、8：00 朝食

9：00～15：30頃 観光③万里の長城

「八達嶺」は2度ほど行ったが、どうもそこは感じが違う。聞いてみると、「居庸関長城」というところだった。ものすごく急な坂で、終点がある。

15：40頃～ 北京市内を一人で探検

北京四中のすぐそばに北海公園がある。そこを通り抜けると、すぐに故宮の外側。中山公園を歩いて天安門広場まで、約1時間半歩いた。帰りはタクシー。

19：00 夕食

20：00 映画観賞（フェアプレーに関する啓蒙映画）

8/20（土）7：00 起床、8：00 朝食

8：30頃～ 高校生2名（YとK）&理事として参加されている田原氏&中塚の「日本チーム」は、サマーパレス（頤和園）へ出かけた。地下鉄移動（全線2元）は貴重な経験。

12：30頃 北京四中へ戻って昼食

14：15 教師ミーティング

16：30 クロージングセレモニー

歓迎の歌や踊り、ご挨拶、優れたアートパフォーマンスの再演、そしてクーベルタンワードの表彰。チームごとに登壇するが、メダルをもらえない者も3割程度いた。

開催校のバトンが、北京四中から次期開催のノルウェーに渡された。

最後は全員で蛍の光の合唱。その伴奏をKがした。大活躍。

19：30 フェアウェルディナー

ミニエキスポをやった前庭で、バイキング方式で食事しながらのパーティ。

21 時ごろに、最初のバスが出発、空港へ向かう。徐々にお別れモードに…

8/21 (日) 7:00 起床、8:00 朝食

8:00 「日本チーム」は、観光&買い物ツアー。地下鉄で前門～天安門広場へ

11:30 北京四中出発

15:45 北京国際空港発 →3 時間半のフライト (時差 1 時間) →20:15 羽田空港着

両家族総出でお迎え。8 泊 9 日の引率業務は無事終了。

ちょうどこの日は高校選手権予選地区大会決勝があり、本校サッカー部は 22 年ぶりに同大会の都大会出場を決め、池袋で祝勝会をやっているとのこと。羽田から直行し、顧問の H 氏、元顧問の I 氏、そして監督代行としてチームを率いた國分氏 (サロン会員) とともに祝杯を上げた。

その日のうちにちゃんと帰宅したが、翌日は高体連研究部の仕事で宮城県に…

< 質疑応答 >

中塚：スライドをご覧になって、白木さん、前回との違いなどをお聞かせいただけないでしょうか。

白木：施設がやっぱり違いますね。前回も「十分だ！」とと思っていましたが、やっぱり広いですね、中国は。

田原：附属高校の生徒さんがものすごく成長したと思います。最初はすごくナーバスになっていて、言葉の問題などをいろいろ心配していましたが、皆でダンスをしたりする中で気持ちがほぐれていき、後半になると、いろんな人と積極的に話をしたり、違和感なく、皆になじんでいました。進路についても、国際的な活動するような仕事を考えるようになったと言っていました。ずいぶん意識が変わったと思います。

白木：北京四中の生徒さんがアシスタントをやっているのは前回と異なる場所ですね。前は大体、大学生がやっていました。ドイツ人とギリシャ人の大学生がサポートしていました。

中塚：こういうものの受け入れに特別慣れている学校なのかどうかわからないけど、交流会やパーティなど、いろんな場面で民族舞踊や歌などのパフォーマンスでもてなしてくれました。とにかく芸達者というか、もてなしの心というか…

田原：プログラム全部終わってから北京四中の先生と話す機会がありましたけど、北京四中は中国のトップ校。だからなおさら国際交流が重要なんだと言っていました。外国からいろんなことを学びたい、特に日本には関心を持っていて、交流したいということでした。

4. 日本をいかに伝えるかー学校紹介とアートパフォーマンス

中塚：ディスカッションのテーマでもあるのですが、今回、フォーラムに参加するにあたって、5 分間の学校紹介と、7 分間のアート・パフォーマンスの準備が大変でした。限られた時間、人員で、日本の、それも今の日本をどうやって伝え、またどういふものをメッセージとして発信していくかということです。

1) 学校紹介

「嘉納治五郎」のクリアファイルに、英文の学校紹介 (学校が用意しているもの) と今回のスライドのコピーを入れたものを、事前に全員に配布しておいた。セラー服姿の Y と K の英語によるプレ

ゼン内容は、概ね次のとおり。

日本は美しい国。富士山や桜があって四季がある。

3月11日、M9の大地震が発生し、津波や原発事故で大きな被害を被った。ライフスタイルの見直しも迫られている。海外の方からの多くの支援に感謝します！

さて、私たちの学校は、1888年創立で、東京にある。教員養成を担う東京高等師範学校を前身とする筑波大学の附属学校である。いま私たちは制服を着ているが、実は1970年代、生徒会の活動により、本校では服装は自由になった。本校の校風は「自主、自立、自由」である。

学校は4月に始まり、月～金の8～15時まで授業がある。そして放課後は学校でいろんなスポーツをしている。本校は、学校スポーツ発祥の地である（と言い切ってしまった…）。

その理由は、明治時代の校長である嘉納治五郎の影響が大きい。嘉納治五郎は教育者として本校の校長を長く務めたが、柔道の創始者として有名である。また、スポーツによる国際交流のパイオニアであり、中国から7,000人もの留学生を受け入れた。アジアで最初のIOC委員で、日本体育協会の創始者でもある。このような校長先生のもとで、日本の学校スポーツが展開していった。

日本では、高校スポーツのトーナメントが盛んで、特に野球やサッカーの全国大会はメディアが大きく取り上げる。我々もそのような大会に参加するが、この他に学習院高等科一天皇家の教育のためにできた学校（と言い切ってしまった…）と毎年一度の定期戦がある。Yはチアリーダーとして、Kはテニス部員として参加した。

私たちはスポーツのチカラを信じています。このフォーラムで友達になりましょう！

2) アートパフォーマンス

まずは、日本で最もポピュラーな体操と言える「ラジオ体操」を紹介し、実際に第一体操を、参加者全員にやってもらった（面白がってやってくれていた）。

次に、「外国の人が持つ日本の印象って何だろう」「フジヤマ、忍者、サムライかなあ…」「けど私たちはそうじゃないよね」ということで、今の日本の若者文化を代表する「AKB48」を紹介し、音楽に合わせて踊った…（ちょうど7分間）

ここでは二人は「なんちゃって制服」を着用している。

Ⅲ. ディスカッション

◆参加者の費用負担

藤田：基本的なことですが、参加費は？

中塚：ゼロです。滞在費はクーベルタン委員会（IOCからのサポート）、渡航費は大学から出してもらっています。

真田：オリンピック CORE の重要な行事として参加してもらいました。

中塚：だからいろんなところで報告していかないと…

◆前回大会の様子

中塚：ところで、前回の参加者2名はどのように選ばれたのですか？

白木：いろんな生徒に海外との交流を経験させたいということで、交流プログラムに行っていない子から。うちはスポーツタイプではなく、応募した生徒は英語での討議に興味があるような子でした。

学年で5～6名応募があったと思います。作文を書かせて面接して。私たちが行ったときは9月にあったので、夏休み中に「特訓だ～」と言って走らせたり…。ずっといろいろやっていました。だからメダルを取れたときは本当にうれしかったと思います。

田原：ユースフォーラムが終わった後も「ジョギングは続けてます」と言っていました。

白木：そういうことあったからか、二人ともいい大学に進学できています。二人の生徒にはいい契機になっていますね。

◆帝京高校におけるオリンピック教育

中塚：せっかくなので、もう1枚の資料「オリンピズムとオリンピックムーブメント」について、説明してもらえますか？

嶋崎：自分の勤めている帝京高校は、スポーツ推薦で入学した生徒だけ二つのクラスにまとめています。競技は野球、サッカー、男子バスケットボール、女子柔道、空手…。最近そこに、卓球やレスリングの生徒が入ってくるようになりました。学校の近くにナショナルトレセンがあって、そこでトレーニングしている子たちは近くに住んで区立中学に通っていました。それが高校生になって、預かってくれる高校はないかということで、うちのスポーツクラスで受け入れました。卓球、体操、レスリング、の子がいます。

高校生は、スポーツを文化としてとらえることは考えません。スポーツは勝つためにやっているという世界です。けれど、そこを何とかしたい。総合学習の時間を使って、高校1年生に対して、スポーツとは何か、健康とスポーツ、総合型地域スポーツクラブについて、部活動の意義、メディアとスポーツとか、いろいろやってきている流れの中で、2010年のバンクーバー五輪があったので、オリンピズムやオリンピックムーブメントについて取り上げることにしました。ナショナルトレセンから来ている子たちは多少こういうことを教わっているようだし、ユース五輪に参加した生徒—卓球の谷岡あゆか・現在2年生—もいます。そこでは競技会だけでなく、教育プログラムもあります。「シンガポールでどんなことをやってきた？」と語らせると、教育プログラムの中で「アンチドーピングのプログラムがあった」ことを話してくれました。「オリンピックってただの競技会じゃないの？」、という話になります。

50分でオリンピックの歴史、クーベルタン、嘉納治五郎、過去の日本のオリンピックを駆け足で話しているので、あまり深いことはできません。たまたま今日持ってきたので、面白いからコピーして配ろうやという話になったのでお配りした次第です。

中塚：嶋崎さんは国語の先生です。総合学習の時間を使っているのですね。

嶋崎：総合学習の担当なので。スポーツクラスに入ってくる生徒はサッカーや野球しかしていません。勉強はちゃんとしています。もしかすると普通に帝京に入ってくる子よりも勉強はしているかもしれませんが、けれどもこういうことは何も知りません。勝つためにどうするかは知っていても、スポーツとは何ぞやとか、考えたこともありません。毎回レポートを書かせていますが、彼らにとっては初めて聞く話ばかりのようです。日本のスポーツ教育はどうなっているのか、真剣に考えなくてはいけないと思います。

真田：生徒の反応はどうか？ どんな変化がありますか？

嶋崎：くだらないことですが、野球部は練習が辛いじゃないですか。けれど、「スポーツって楽し

むためにやってるんだよな」と、授業で学んだことを使って頑張っています（笑）。何のためにやっているのかをはきちがえて入ってくる子がいるけど、徐々に修正はされていると思います。幅ができてきて、上級生になるころには少しは変わってきます。オリンピックについて知らないこと、たとえば「幻の東京オリンピック」のことなどを知って感動しています。彼らは、日ごろスポーツを突き詰めているはずだけど、毎回新しい発見があるようです。

◆オリンピック教育－「歴史」の学習に焦点を置いた試み

中塚：オリンピック教育で何をやればいいのかという話ですが、取っ掛かりとして、歴史の勉強はやりやすいし、過去のオリンピックの話は押さえておかないといけないのではないのでしょうか。

配布資料の中に、今年の本校の文化祭での展示資料をつけました。3年生の総合学習で「オリンピックと教育・スポーツ」という題で通年の授業を持っています。そういうことに興味を持つ生徒が5名、選択していますが、大変密度の濃い授業をやっています。講義の内容は、歴史に関することが多いですね。生徒にとっては、クーベルタンの話も嘉納治五郎の話もすべて新鮮です。特に、自分たちの身近な話題、たとえば学習院との定期戦が嘉納治五郎とつながってくるようなことがあるので面白さを感じているようです。こういう発見や感動を、この講座を取っていない子にも何らかの形で伝えたいなあと、文化祭で展示したのですが、あまり人は入っていませんでしたね。日本で、日本からのオリンピック教育を考えていく必要があると思います。

宮崎：去年、体育理論の授業でオリンピック教育を取り上げるときに、テーマを決めるにあたって何に興味があるかを生徒に聞いてみました。その中で、「日本とオリンピック」という柱があり、招致のことや、身の回りにある、今では当たり前のこと、たとえば高速道路もカラーテレビも、オリンピックと関係しているというようなことを取り上げました。冬休みに親戚が集まったようなときに「記憶に残っているオリンピックのことを聞いてこい」と言ったところ、ベルリンという話もありましたが、1964年の東京オリンピックの話題が多かったですね。いま、東京オリンピックの時に子どもだった人が、ちょうど親になっています。これから先のことを考える上でも、いまの身の回りのことを知る上でも、歴史の勉強は大切です。

実は生徒が興味を持っていることの一番人気は「古代オリンピック」でした。去年は50分の中いろいろな詰め込みました。かつての幅跳びや槍投げの紹介をしたところ、生徒は興味津々で、「やってみたい」と言っています。今年は2回シリーズで古代オリンピックの授業をやるかと思っています。真田先生には「衣装を作れ」と言われています（笑）。おもりを持っているのと持っていないのでどちらが飛べるか、おもしろそうですね。

中塚：フォーラムに参加して思ったのは、歴史と言ったときに、ヨーロッパ人の歴史になっているような気がすることです。するとギリシャに行きつくんです。オリンピックだから、まあギリシャでもいいのかなとも思うけど、我々の場合はそうじゃないですね。俺たちには俺たち自身の歴史があるわけですよ、八咫鳥の話も含め。あまり自分たち自身の歴史の話が行き過ぎてしまうと、思想的にあぶないと思われるけど、学校の中でやらなさすぎですね。自分たちの歴史にもっと目を向ける教育プログラムが必要で、オリンピック教育の中でやっていく必要があるのではないのでしょうか。

宮崎：うちの生徒は、古代オリンピックで勝者に贈られる詩に興味を持つ者がいます。世界史と関連させて彼らは理解し、勝手に発展させています。体育理論の授業ですが、いま想像できるオリンピックだけではないところに興味が広がっています。「ヘラ祭」という女性だけの祭典にもすごく興味を示しますね。

田原：可能であればいろんな教科の先生と連携しながら、一つのトピックを扱えると面白いと思います。

宮崎：そういう可能性もある教材です。

中塚：話は尽きないだろうけど、時間が尽きてしまいました。

続きは「ルン」で…。

IV. 発表者の感想・意見（中塚義実）

ディスカッションの時間があまりとれなかった（ルンではたっぷり取れましたが）し、いろいろ思うところもあるので、少しばかり感想・意見を述べたいと思います。

「オリンピック教育」と言ったときに、やはり普通の人イメージするものと、いま我々が取り組もうとしているものに大きなずれがあるなというのがまずあります。オリンピックは「大きな運動会」ととらえている普通の人にとって、「大きな運動会」教育とはすなわち、競技力向上のためのトレーニングの改善や、そのためのスポーツ医・科学の貢献などがイメージされるのではないのでしょうか。現にルンでもそのような話が出てきたし、学校の教員と話をするときも、まず出てくるのはそのようなイメージです。「オリンピック教育はそうではないのだ。“オリンピズム”という理念の教育なのだ」と言っても、何のことやらわかってもらえません。時間と働きかけが必要です。

「オリンピック」の次に「パラリンピック」をつけたがる人も同様の認識でいるのでしょうか。招致活動においては、オリンピックという競技会と、引き続き行われるパラリンピックという競技会を合わせて招致するのだから「オリンピック・パラリンピック」招致活動でかまいません。けど、“オリンピズム”という理念の教育である「オリンピック教育」にパラリンピックを付けようとするのはおかしいですね。「オリンピック・パラリンピック教育」という言葉は成り立ちません。それを認めるなら、「オリンピック・パラリンピック・デフリンピック・スペシャルオリンピック…」と、障碍の種類だけ併記しなくてはならなくなるでしょう…。

次に、「オリンピック教育」と言ったとき、いまはヨーロッパ人による、ヨーロッパ人のための教育プログラムになっているという印象を持ちました。確かに古代ギリシャで行われていた祭典競技会がルーツなので、古代ギリシャの勉強をするのは良いことなのですが、ギリシャの神様はどちらかというとヨーロッパ人の話であって、日本には別の神様がいて別の話があるのです。中国にもアフリカにもメキシコにも、それぞれ学ぶべき先人の営みと経過があるわけです。それが、「オリンピック教育」といったときに、クーベルタンに集約され、ヨーロッパ人の歴史や文化を学ぶ構図に取り込まれるのはあまりいい気がしませんね。「クーベルタンスクール」にちょっと引っかかるのはその点です。「嘉納治五郎スクール」でええやないか、と思うのです。“志”は同じなのでから。

そして彼らの“志”は、スポーツを通しての“ゆたかなくらし”を志向するサロン2002の“志”とも一致します。いっそのこと、クーベルタンも嘉納治五郎も、サロン2002の名誉会員として入会を認めてあげてもいいかな…、そんなことを考えたりもします。

他にも感じたことはたくさんありますが、また別の機会に。

最後に、当日の配布資料に書いた、ディスカッションのテーマを下に挙げておきます。まだまだ議論は深められていないので、引き続き別の機会に話を続けていきたいですね。

皆さんも考えておいてください。

1) 青少年の国際交流プログラムについて

- ・外国へ行ったとき、日本の何を、どのように伝えるか？

- ・外国から来てくれたとき、日本の何を、どのように伝えるか？
- ・諸外国について、何を、どのように学ぶか？
- ・コミュニケーション能力について、何を、どのように学ぶか？

2) 「オリンピック教育」をどうとらえるか？

- ・ここでいう「オリンピック」は、“競技会”を指すのか、それとも“理念”を指すのか？
- ・ここでいう「教育」は、青少年向けなのか？
 - せっかく“スポーツ”が、教育から、青少年限定から、解放されようとしていたのに…
- ・「オリンピズム」は人類普遍の真理か？
- ・「クーベルタン」に集約してよいのか？

3) 日本での／日本からの「オリンピック教育」をどうとらえるか

4) その他

以上